

# 大学用語集

## あ

### ■ IR (インスティテューショナル・リサーチ) → P.29

Institutional Research の略。高等教育機関において、機関に関する情報の調査及び分析をする機能または部門。機関情報を一元的に収集、分析することにより、機関が計画立案、政策形成、意思決定を円滑に行うことを可能とさせる。また、必要に応じて内外に対し、機関情報の提供を行う。

### ■ アイス・ブレイキング → P.44

参加者の互いの緊張や警戒を解き、コミュニケーションをスムーズにするための導入アクティビティ。研修・セミナー・ワークショップ・会議・体験学習などの場面でよく使われる。

### ■ アウトカム基盤型教育 → P.8 / P.16

修了者の到達すべき目標を明確にし、その目標を達成できるような教育を提供するという考え方の下、到達度評価を適用するカリキュラム計画を用いて実践する教育。欧米で開発された教育法で、日本では医療系の大学でこの教育への移行が進み、「教育の質保証」の要請から、様々な大学で転換が進んでいる。

### ■ アクティブ・ラーニング → P.18 / P.32 / P.41

教員の一方的な講義形式の教育と異なり、「学修・教育到達目標が効果的に達成されるように授業設計された能動的な学びを導く参加型授業形態」のこと。学生が主体的に取り組み、他者と対話し学ぶことによって、知識だけではなく、社会的能力や経験などの汎用的能力の向上に有効とされている。反転授業、PBL、グループワークなどがある。

### ■ 一般目標 (General Instructional Objective : GIO) → P.26 / P.30 / P.34 / P.50

学修によって到達できる状態、つまり期待される学修効果のこと。何のために(学修する理由)、どのような能力を修得するのかを包括的に示す。SBOs が全て修得された時に GIO が修得されるという関係性を持つ。

## か

### ■ 学修成果 (ラーニング・アウトカム) → P.2 / P.12 / P.26 / P.34 / P.51

学生がどのような能力を身に付けて卒業するのかという学修成果。言い換えると、学生が修得すべき知識や能力などを具体化したもの。それぞれの学修成果は、具体的で、一定の期間内で達成可能であり、測定や評価が可能なものでなければならない。

### ■ 課題解決型学習 (Problem-Based Learning : PBL) → P.41

正解のない議論を通して、問題解決へのアプローチ方法を身に付ける学修法。主体的・協働的に問題を発見し、解決する能力が向上する。学生の自己学習、少人数のグループ学習

と討論を通じて問題解決策を導き出す。「問題解決型学習」と同義語。

## ■ 学校教育法施行規則

→ P.12

学校教育法施行規則は、文部科学大臣が、学校教育に関する行政事務について、学校教育法もしくは学校教育法施行令を実施するために定める文部科学省令。

## ■ 観察記録

→ P.51

日々の現場で学修者の様子を観察・記録したものの。成績評価に用いることがある。

## ■ 客観試験

→ P.51

多肢選択法や○×法などを用いた筆記試験。採点者が異なっても同一の採点ができる。

## ■ 教育の質保証

→ P.26

大学の教育研究活動の質や学生の学修成果の水準などを自ら継続的に保証することを指す。

## ■ 教育ワークショップ

→ P.17

教育の改善を目的とした参加者が意見を出し合い、討論や討議により新しいものを創出する協同作業。参加者全員が学びとるグループ学習の一つ。

## ■ 形成的評価

→ P.51

学生の学修成果は段階的に備わっていくという考え方にに基づき、その後の学習を促すために行う評価手法の一つ。例えば1授業の学習過程を段階別に捉えて、各段階において小テストなどを用いて評価し、教員のフィードバックにより学修成果を積み重ねていくようにする。いわゆる一夜漬けによる学修成果と比較して、知識の定着度や理解度が高いとされる。

## ■ 個別行動目標

(Specific Behavioral Objectives : SBOs)

→ P.26 / P.30 / P.34 / P.50

学修者がGIO（一般目標）を達成したとき、何ができるようになっていのかを個別的に観察可能な具体的行動（動作を伴う態度や技術だけでなく暗記し、理解し、応用するなどの知識領域の行動を含む）で示したもの。

## ■ コンピテンシー → P.11 / P.14 / P.15

単なる知識や技能だけでなく、様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求（課題）に対応することができる。

## ■ コンピテンス → P.2 / P.11 / P.15

学生が身に付け、社会で活用し得る知識や技能。知識・技能に態度を含む包括的な能力を指す。コンピテンシーの上位概念。コンピテンスがスキルをベースに判断するのに対し、コンピテンシーは「行動」がベースになる。

## さ

## ■ 実地試験

→ P.51

実際場で、技能・態度などを試す試験。

## ■ シミュレーションテスト

→ P.51

実際の状況に即した問題の作成や、現場の設定をして行うテスト。

## ■ 初年次教育

→ P.16

1年次生を対象に、レポート作成や資料収集など、大学における学修に必要な基本的な知識・技能・態度を伝える教育。本学では全学共通教育の初年次教育科目「自主創造の基礎」において、全学部で初年次教育を実施している。その他各学部で実施する科目もある。

## ■ スチューデント・アシスタント (SA) → P.42

学部学生が、コンピュータ科目や実験・実習・実技科目等のほか、多人数授業の補助、受講に際しての留学生への対応や、ハンディのある受講生等への学習補佐を行う。

## ■ 総合的評価 → P.51

科目合格や進級・卒業の判定など学生の学修の積み重ねにより得られた学修成果を包括的に行う評価のこと。定期試験や卒業試験などが該当。

# た

## ■ 大学設置基準 → P.33 / P.39

大学を設置し運営していくにあたり必要な最低の基準を定めた文部科学省令。

## ■ チーム基盤型学習 (Team-Based Learning : TBL) → P.41

少人数対象の課題解決型学修 (PBL) に対して、大人数対象でも教員が1名でも多数の学生に実施できるアクティブ・ラーニング。受動的な学修姿勢が、能動的に変化すると期待ができる。〈授業例〉①個人の事前学習(予習) ②個人またはグループテストと教員のフィードバックによる事前準備確認 ③講義における応用課題 ④グループ間でピア評価を実施

## ■ チュートリアル教育 → P.44

少人数で構成された学生のグループにある課題が与えられ、学生がその課題を検討し解決していく教育方法。イギリスなどでは、その担当教員はチューターと呼ばれ、知識を提供する役割ではなく、議論を進行させる役割が重視される。

## ■ ティーチング・アシスタント (TA) → P.42

科目担当教員の指示により、学部の実験・実習・実技等の教育補助を行う業務の総称、もしくはその担い手である大学院学生。

# な

## ■ 日本大学学修満足度向上調査 → P.28 / P.29

2018年(平成30年)4月から、日本大学・日本大学短期大学部の全学生(大学院を除く)を対象に実施。大学における学修・学生生活・就職を含めて学生のニーズ・成長実感などの実態を学生アンケートにより調査。毎年度4月(全学年)、10月(1年次)、卒業時に実施し、経年的な集計データに学生の成績や就職情報などを掛け合わせた組織的な統計分析のほか、学生個人の状況の把握により学生への効果的なフィードバックを行うなど、教学IRの観点から大学の各種改善につなげていくことを目的としている。

## ■ 認証評価 → P.20

全ての大学、短期大学、高等専門学校は、7年以内ごとに文部科学大臣が認証する評価機関の評価を受けることが法律で義務付けられ、評価の結果は公表することとされている。大学が社会の評価を受けるとともに、大学自ら改善を図ることが求められている。

# は

## ■ ハインリッヒ → P.42

Herbert William Heinrich (1886-1962年) アメリカの数学者。損害保険会社の技術・調査部で安全技師を務めた。労働災害の発生確

率を統計的に解析し、1929年に発表した論文で経験則「ハインリッヒの法則」を提唱した。

### ■ バズ・セッション → P.45

まず、参加者が少人数グループに分かれて自由に討議。そこで得られた結論をグループの代表者が発表し、さらに参加者全体としての討議を進めるといった、演習に用いられる手法の1つ。

### ■ パネル・ディスカッション → P.45

異なる意見をもった数人の討論者（パネラー）が聴衆の面前で一定の論題に関して討議し、その後、聴衆も討議に加わって、質疑応答や意見発表を行う座談会式公開討論法。

### ■ ピア評価 → P.51

同僚評価。学生同士がお互いを評価するときなどに用いる。成績評価に用いることもある。

### ■ ヒヤリ・ハット → P.42

幸い事故には至らなかったものの、一瞬ヒヤリとしたりハットとしたりしたこと。

### ■ フィードバック → P.34 / P.41 / P.51

結果だけでなく、結果を導くための計画立案や実践行動の反省点についても伝える。有効な方法は（1）ポジティブだけでなくネガティブなものも（2）すぐに（3）より具体的な形で伝えること。

### ■ フォローアップテスト → P.51

学生の知識や理解の定着を確認し、その結果を学生にフィードバックするために行うテスト。

### ■ プリテスト → P.51

学生の興味・関心・態度・知識などを調査するために行うテスト。

### ■ ポストテスト → P.51

学生の理解度を把握し、理解していない部分の指導を徹底するために行うテスト。

## ま

### ■ 三つの方針

→ P.8 / P.12 / P.14 / P.16

「卒業の認定に関する方針」（ディプロマ・ポリシー、DP）、「教育課程の編成及び実施に関する方針」（カリキュラム・ポリシー、CP）及び「入学者の受入れに関する方針」（アドミッション・ポリシー、AP）

### ■ ミニッツ・ペーパー → P.41

学生に授業のポイントと疑問点、理解度・評価などを記入してもらうカード。毎回、授業で配付して回収し、次の授業に生かす。

## ら

### ■ ルーブリック → P.18 / P.26 / P.41

学修の達成度をマトリックスで示された「項目別・段階別の評価指標」を用いて、主にパフォーマンスを測定する評価方法。アクティブ・ラーニングが導入され、ペーパーテスト（客観試験）では評価が難しい主観に頼りがちな評価を、問主観性を担保して評価できることから、必要性・重要性が高まっている。

### ■ ロールプレイ → P.32

現実にかかる場面を想定して、その場面にいるであろう人物の役（立場）を複数の人が演じ、疑似体験する学習方法。課題解決の手がかりを得たり、ある事柄が実際に起こったときに適切に対応できるようにする効果がある。